

満足な就職結果を得るのは誰か¹

——学生の主体性や学問習得か？大学ランクか？——

東京成徳大学 応用心理学部

21C999 成徳 花子

1 本研究の目的と先行研究の検討

本研究は、満足な就職結果を得るのはどのような学生であるのかを明らかにすることを目的とし、「主体性」、「学問の習得」、「大学の選抜性」という3つの要因と「就職結果の満足度」の関係を検証する。

新卒採用において、企業はどのような人材を求めているのだろうか。日本経済団体連合会教育問題委員会（2011）が2010年に実施した「産業界の求める人材像と大学教育への期待に関するアンケート結果」では、学生の採用において企業は、「主体性」をもっとも重視していることが明らかになった。企業が、主体性のある学生を求めていることは明らかである。では、学生の本分たる「学問の習得」はどうだろう。荻谷剛彦ほか（2007）は、選抜性の低い大学（入学偏差値の低い大学）の学生は、良い成績を修めることで就職結果に正の（良い）影響がある可能性を示唆している。また、Benesse 教育研究開発センターが2008年に実施した企業調査、「社員採用時の学力評価に関する調査」でも半数以上の企業が「大学の学部課程で身につけた知識・スキル」を「重要である」と回答している（岡部 2010）。つまり企業は、主体性および学問の基礎的知識・スキルを身につけた学生を求めていることがわかる。こうした調査結果を踏まえると、主体性や学問の習得といった企業場求める資質・能力を持つ学生が、満足な就職結果を得るというメカニズムが成立しているはずである。

しかし一方で、必ずしも主体性や学問の習得だけが、就職結果を左右するわけではないことも指摘されている。例えば、大手企業への説明会への参加が、いわゆる「学歴フィルター」によって選抜性の高い大学の学生に制限されていることが明らかになっている（斎藤 2007）。つまり日本の雇用市場では、出身大学の「選抜性の高さ」、つまり大学の入学偏差値の高さによって、就職機会に格差が存在することが複数の研究で明らかになっているのである（松尾 1999; 平沢 2010 など）。

これは、多くの大学生と日本の大学教育にとって、大きな問題を生じさせる。なぜなら、主体性や学問の習得は、大学入学後の教育や諸活動によって学生が身につけることができるものであるが、大学の選抜性は大学入学時点で決定しているからである。一度大学に入学してしまうと、入学後の大学での頑張りによって就職結果を変えることができなくなるのであれば、大学での教育や活動の意味が希薄に感じられてしまうだろう。

実のところ、満足な就職結果を得る学生は誰であり、そのために必要なことは何であるのか。大学入学後の教育や活動は、就職結果に良い影響を与えることができないのだろうか。本研究は、こうした問題設定のもと、「主体性」や「学問の習得」、そして「大学の選抜性」の高さは、就職結果とどのような関係があるのかを明らかにすることを目的とする。

¹ 本論文は、以下の論文をもとに、授業用資料として堤が修正等を加えたものである。

・横井瑠衣, 2012, 「満足な就職結果を得るのは誰か——大学の選抜性か、主体性・学問の習得か」東京大学教育学部比較教育社会学コース・Benesse 教育研究開発センター編『社会科学分野の大学生に関する調査報告書 [2010年]』, 64-75.

2 仮説の設定

前章で示した関心と目的のもと、本研究では、以下の5つの仮説を設定する。

先行研究によれば、選抜性の高い大学の学生の方が就職の機会に恵まれている。したがって、選抜性の高い大学の学生の方が、就職結果に高い満足を得ている可能性が高い。そこで以下の仮説1を設定する。

理論仮説1：選抜性の高い大学の学生ほど、満足な就職結果を得ている

作業仮説1：大学入学偏差値が下位グループの大学の学生に比べ、上位グループの大学の学生のほうが、就職活動の結果に満足している。

先行研究によれば、企業は仕事に対する主体性のある人材を求めている。したがって、主体性のある学生ほど、満足した就職結果を得ている可能性が高い。そこで、以下の仮説2を設定する。

理論仮説2：仕事に対して主体性のある学生ほど、満足な就職結果を得ている。

作業仮説2：仕事に対する主体性得点が高い学生（複数の質問で仕事に対する主体性が高いと回答している学生）ほど、就職活動の結果に満足している。

先行研究によれば、学問の基礎的知識・スキルを習得した学生を求めている。したがって、学問の基礎を習得した学生ほど、満足した就職結果を得ている可能性が高い。そこで、以下の仮説3を設定する。

理論仮説3：大学の学問の基礎を習得した学生ほど、満足な就職結果を得ている。

作業仮説3：専攻分野の最低限の知識を身につけたと答える学生ほど、就職活動の結果に満足している。

先行研究によれば、大学の選抜性の高さによって、就職機会には格差が生じている。いわゆる「学歴フィルター」に象徴されるように、選抜性の低い大学の学生が就職機会に恵まれていないのだとすれば、主体性や学問の基礎の習得は、選抜性の高い大学でしか就職結果に効果をもたないのではないかと考えられる。したがって、以下の仮説4および5を設定する。

理論仮説4：仕事に対して主体性があるほど満足な就職結果を得られるのは、あくまで選抜性の高い大学の学生に限られている。

作業仮説4：大学入学偏差値が上位グループの大学の学生は、仕事に対する主体性得点が高い（複数の質問で仕事に対する主体性が高いと回答する）ほど就職活動の結果に満足している。一方で、大学入学偏差値が下位グループの大学の学生では、仕事に対する主体性得点と就職活動の満足に関係が見られない。

理論仮説5：大学で学問の基礎を習得することで満足な就職結果を得られるのは、あくまで選抜性の高い大学の学生に限られている。

作業仮説5：大学入学偏差値が上位グループの大学の学生は、専攻分野の最低限の知識は身につけたと答えるほど就職活動の結果に満足している。一方で、大学入学偏差値が下位グループの大学の学生では、専攻分野の最低限の知識は身につけたと答えることと、就職活動の満足に関係が見られない。

3 調査データと変数の整理

前章で設定した仮説を検証するため、次章において、質問紙調査のデータを用いてクロス集計分析を行う。本章では、質問紙調査の概要を整理し、分析で用いる変数の操作的定義を提示する。

3-1 調査概要

本研究で用いる調査の概要は、表 1 に示した通りである。

ただし、本調査は就職結果を従属変数として用いるため、表 1 で示した調査対象のうち、4 年生のみを分析対象とし、日本の就職市場の一般的傾向を把握するために留学生も除外している。

表 1 調査の概要

調査対象	国内の 4 年制大学 16 校の社会科学分野の 18 学部に所属する 1 年生と 4 年生、合計 1886 人 (1 年生 1131 人、4 年生 755 人)
調査票配布数	2996
有効回収率	63.0%
調査方法	学校通しの自記式調査法
調査時期	2010 年 10 月～12 月

3-2 変数の設定と分析上の注意

分析には、「大学入試難易度」、「就職活動の結果」、「仕事に対する主体性得点」、「専攻分野の最低限の知識」の 4 つの変数を用いる。それぞれの変数の操作的定義は、表 2 に示した通りである。

なお、4 年生のみが対象となっている上、特に「就職活動の結果」には無回答が多く含まれていたため、調査全体に比して分析対象者が少なくなっている。そこで、クロス集計には χ^2 乗検定の結果を記しているが、あくまで参考値として参照されたい。

表 2 変数の操作的定義²

大学入試難易度	調査対象の大学の偏差値を用い、54 以上の大学を「上位グループ」、53 以下の大学を「下位グループ」とした。なお、大学の偏差値は、ベネッセコーポレーション「進研模試 高 2 生総合学カテスト 11 月」(2009 年 11 月実施)の結果をもとにしている。
就職活動の結果	少しでも就職活動をしたことがある大学 4 年生を対象に、就職活動全般を通して就職活動の結果に満足しているかを、「とてもあてはまる」「あてはまる」「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」の 4 件法で尋ねた質問を用いた。「とてもあてはまる」と「あてはまる」に回答したものを「満足している」、「あまりあてはまらない」と「まったくあてはまらない」に回答したものを「満足していない」として、2 段階の変数を作成した。
仕事に対する主体性得点	将来の仕事について、「難しい仕事にも積極的に挑戦していきたい」と「職場で企画や提案を積極的に行いたい」という 2 つの項目に、「4 点：とてもあてはまる」「3 点：あてはまる」「2 点：あまりあてはまらない」「1 点：まったくあてはまらない」の 4 件法で尋ねた結果を用いた。2 つの変数の得点を単純に合計し、2 点から 8 点の 7 段階に得点化したうえで、2 点～5 点を「低い」、6 点～8 点を「高い」として、2 段階の変数を作成した。クロンバックのアルファ係数は、0.744 である。
専攻分野の最低限の知識	4 年生のみを対象とし、「専攻分野の最低限の知識は身につけた」かどうかを、「とてもあてはまる」「あてはまる」「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」の 4 件法で尋ねた質問を用いた。「とてもあてはまる」と「あてはまる」に回答したものを「身につけた」、「あまりあてはまらない」と「まったくあてはまらない」に回答したものを「身につけていない」として、2 段階の変数を作成した。

² 質問文の詳細と分布は、9 章の参考資料を参照されたい。

4 分析

本章では、3章で示したデータを用い、2章で設定した仮説に従って行った分析結果を示す。

4-1 仮説1の検討

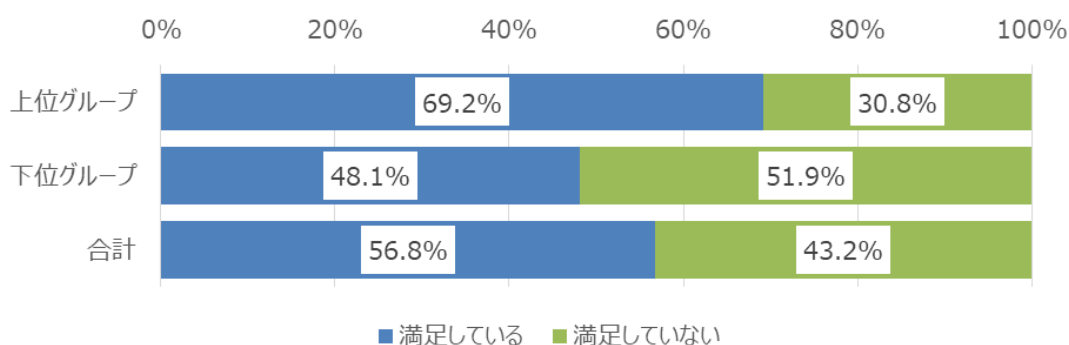
作業仮説1を検討する。表3および図1は、大学入試難易度と就職活動の結果に満足しているかの関係についてのクロス集計の結果である。ここからは、大学入試難易度の上位グループの学生のほうが、下位グループの学生に比べ就職活動の結果に満足していることがわかる。よって、作業仮説1は支持された。

表3 大学入試難易度×就職活動の結果

大学入試難易度	就職活動の結果		合計	N
	満足している	満足していない		
上位グループ	69.2%	30.8%	100.0%	237
下位グループ	48.1%	51.9%	100.0%	335
合計	56.8%	43.2%	100.0%	572

0.1%水準で有意 p=0.000

図1：大学入試難易度×就職活動の結果



4-2 仮説2の検討

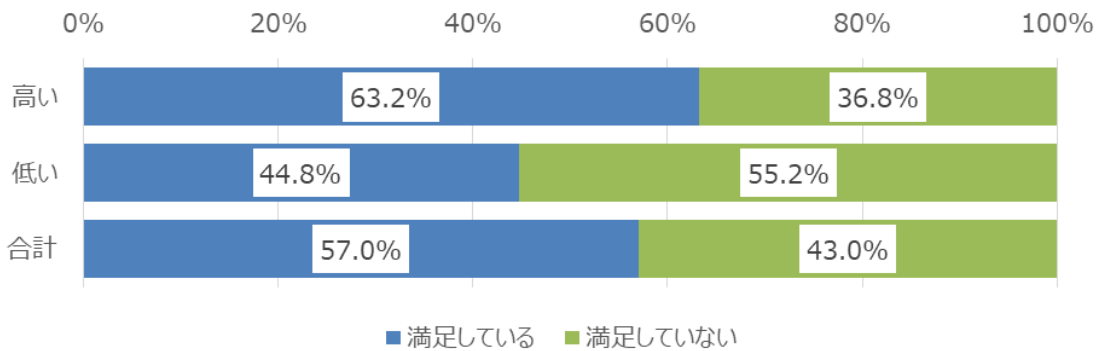
作業仮説2を検討する。表4および図2は、仕事に対する主体性得点と就職活動の結果に満足しているかの関係についてのクロス集計の結果である。ここからは、仕事に対する主体性得点が高い学生のほうが、低い学生に比べ就職活動の結果に満足していることがわかる。よって、作業仮説2は支持された。

表4 仕事に対する主体性得点×就職活動の結果

仕事に対する主体性得点	就職活動の結果		合計	N
	満足している	満足していない		
高い	63.2%	36.8%	100.0%	378
低い	44.8%	55.2%	100.0%	192
合計	57.0%	43.0%	100.0%	570

0.1%水準で有意 p=0.000

図2：仕事に対する主体性得点×就職活動の結果



4-3 仮説3の検討

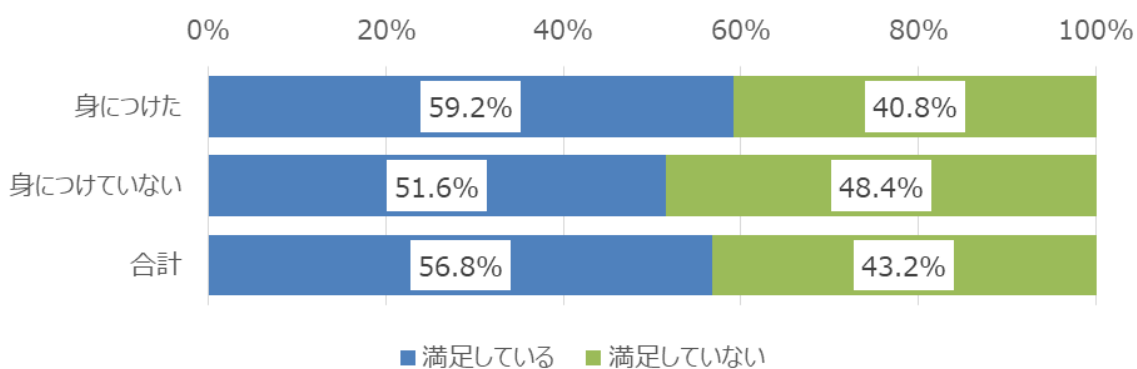
作業仮説3を検討する。表5および図3は、専攻分野の最低限の知識を身につけたかどうかと就職活動の結果に満足しているかとの関係についてのクロス集計の結果である。ここからは、専攻分野の最低限の知識を身につけたと答えた学生のほうが、就職活動の結果に満足していることがわかる。よって、作業仮説3は支持された。

表5 専攻分野の最低限の知識×就職活動の結果

専攻分野の最低限の知識	就職活動の結果		合計	N
	満足している	満足していない		
身につけた	59.2%	40.8%	100.0%	387
身につけていない	51.6%	48.4%	100.0%	182
合計	56.8%	43.2%	100.0%	569

0.1%水準で有意 p=0.000

図3：専攻分野の最低限の知識×就職活動の結果



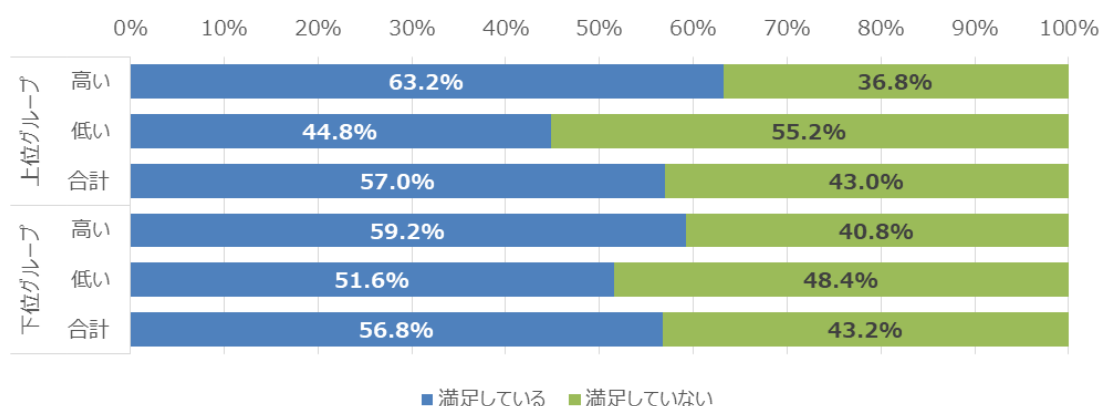
4-4 仮説 4 の検討

作業仮説 4 を検討する。表 6 および図 4 は、大学入学難易度別に、仕事に対する主体性得点と就職活動の結果に満足しているかの関係を示したクロス集計の結果である。事前の想定とは異なり、大学ランクにかかわらず、仕事に対する主体性得点が高いほど、就職活動の結果に満足していることがわかる³。よって、作業仮説 4 は棄却された。

表 6 大学入試難易度×仕事に対する主体性得点×就職活動の結果

大学入試難易度	仕事に対する 主体性得点	就職活動の結果		合計	N
		満足している	満足していない		
上位グループ	高い	63.2%	36.8%	100.0%	187
	低い	44.8%	55.2%	100.0%	49
	合計	57.0%	43.0%	100.0%	236
有意差なし p=0.475					
下位グループ	高い	59.2%	40.8%	100.0%	191
	低い	51.6%	48.4%	100.0%	143
	合計	56.8%	43.2%	100.0%	334
0.1%水準で有意 p=0.001					

図4：大学入試難易度×仕事に対する主体性得点×就職活動の結果



4-5 仮説 5 の検討

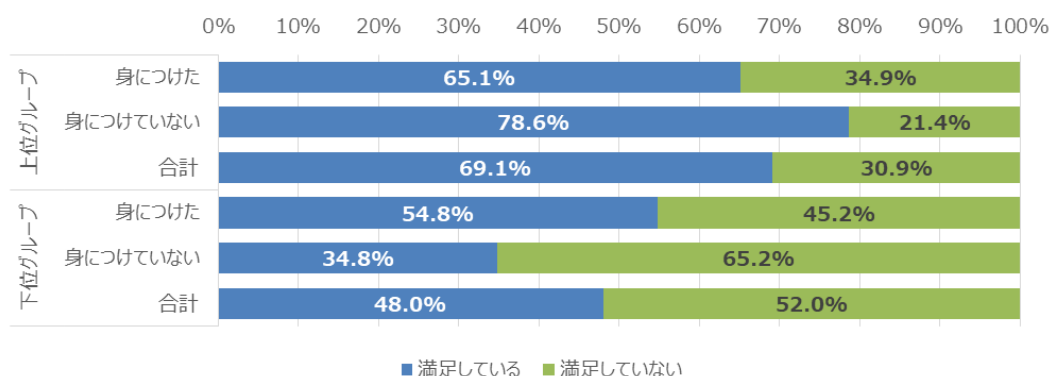
作業仮説 5 を検討する。表 7 および図 5 は、大学入学難易度別に、専攻分野の最低限の知識を習得したと答えたかと就職活動の結果に満足しているかの関係を示したクロス集計の結果である。ここからは、大学入試難易度の高い上位グループでは、専攻分野の最低限の知識を習得したと答えるほど、就職活動の結果に満足していないと答える割合が高い。また下位グループでは、上位グループとは逆に、専攻分野の最低限の知識を習得したと答えるほど、就職活動の結果に満足していると答える割合が高い。これらは、事前の仮説とはまったく異なった結果である。よって、作業仮説 5 は棄却された。

³ 上位グループにおけるクロス集計では、 χ^2 二乗検定による有意水準の結果が「有意差なし」となっているが、これはサンプルサイズの小ささによるものであると考えられるため、ここでは関連を認めることとする。

表 7 大学入試難易度×専攻分野の最低限の知識×就職活動の結果

大学入試難易度	専攻分野の 最低限の知識	就職活動の結果		合計	N
		満足している	満足していない		
上位グループ	身につけた	65.1%	34.9%	100.0%	166
	身につけていない	78.6%	21.4%	100.0%	70
	合計	69.1%	30.9%	100.0%	236
5%水準で有意 p=0.040					
下位グループ	身につけた	54.8%	45.2%	100.0%	221
	身につけていない	34.8%	65.2%	100.0%	112
	合計	48.0%	52.0%	100.0%	333
0.1%水準で有意 p=0.001					

図5：大学入試難易度×専攻分野の最低限の知識×就職活動の結果



4-6 小括

本章では、2章で示した5つの仮説に基づき、作業仮説の検証を行った。

結果、作業仮説1が支持され、大学入学偏差値が下位グループの大学の学生に比べ、上位グループの大学の学生のほうが、就職活動の結果に満足していることが確認できた。

次いで、作業仮説2が支持され、仕事に対する主体性得点が高い学生（複数の質問で仕事に対する主体性が高いと回答している学生）ほど、就職活動の結果に満足していることが確認できた。

また、作業仮説3が支持され、専攻分野の最低限の知識を身につけたと答える学生ほど、就職活動の結果に満足していることが確認できた。

最後に、作業仮説4および作業仮説5については棄却され、事前の推測と異なる結果が得られた。仕事に対する主体性得点の高さと就職結果の満足の間には、大学入試難易度にかかわらず「正の関連」が確認できた。一方、専攻分野の最低限の知識の習得に関する回答と就職活動の結果の満足は、大学入学偏差値が上位グループの大学の学生では「負の関連」が、下位グループの大学の学生では「正の関連」が確認できた。

5 考察・まとめ

5章「考察・まとめ」では、4章でのデータの分析の結果をもとに、以下4点についてまとめます。

- ①4章の作業仮説の検討の結果を解釈する
- ②本論文が第1章で設定した問いや目的に答える
- ③論文の限界を記述する
- ④残された課題について記述する

どのような文章を書くべきでしょうか？

5章の文章を、500字以上であなたが書いてみましょう。

6 引用・参考文献

- ・平沢和司，2010，「大卒就職機会に関する諸仮説の検討」 荻谷剛彦・本田由紀編『大卒就職の社会学——データからみる変化』東京大学出版会，61-85.
- ・荻谷剛彦・平沢和司・本田由紀・中村高康・小山治，2007，「大学から職業へⅢ その1——就職機会決定のメカニズム」『東京大学教育学部紀要』32: 89-118.
- ・松尾孝一，1999，「90年代の新規大卒当労働市場——大学ランク間格差と企業の採用行動」『大原社会問題研究所雑誌』482: 17-37.
- ・日本経済団体連合会，2011，『産業界の求める人材像と大学教育への期待に関するアンケート結果』
- ・岡部悟志，2010，「企業が採用時の要件として大卒者に求める能力」『大学教育学会誌』32(1): 114-121.
- ・斎藤拓也，2007，「就卒採用・就職活動のもつシステム」本田由紀編『若者の労働と生活世界——彼らはどんな現実を生きているか』大月書店，185-218.
- ・横井瑠衣，2012，「満足な就職結果を得るのは誰か——大学の選抜性か、主体性・学問の習得か」東京大学教育学部比較教育社会学コース・Benesse 教育研究開発センター編『社会科学分野の大学生に関する調査報告書 [2010年]』，64-75.

7 謝辞

注1に記載の通り、本論文は、横井瑠衣氏（2012）の論文をもとに、東京成徳大学応用心理学部臨床心理学開講「社会調査演習」の授業用資料として、担当講師である堤が修正を加えて作成したものであり、論文のオリジナリティはすべて横井氏にあります。ここに記し、謝意を表します。なお、本論文（授業用資料）のすべての文責は、修正を加えた堤に帰されます。

8 要約

5章が完成後に追記します。

9 参考資料

分析に使用した変数の質問文と分布は、以下の通り。

表 8 大学入試難易度別の上位／下位グループの分布

	上位グループ	下位グループ	合計
度数	304	451	755
割合	40.3%	59.7%	100.0%

表 9 分析に使用した質問と回答の分布

質問文	とてもあてはまる	まああてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	無回答
【リード文】少しでも就職活動をしたことのある方にお聞きます。あなたには、就職活動を通じて、次のことはどれくらいあてはまりますか。 【質問文】就職活動の結果に満足している	18.2%	31.2%	19.8%	17.8%	13.1%
【リード文】将来の仕事について、次のことはあなたにどれくらいあてはまりますか。 【質問文】難しい仕事にも積極的に挑戦していきたい	28.4%	49.1%	17.0%	4.7%	0.8%
【リード文】将来の仕事について、次のことはあなたにどれくらいあてはまりますか。 【質問文】職場で企画や提案を積極的に行いたい	26.3%	42.6%	24.3%	6.1%	0.8%
【リード文】あなたには、次のことがどれくらいあてはまりますか。 【質問文】専攻分野の最低限の知識は身につけた	8.7%	57.0%	28.9%	5.0%	0.5%